留　学　の　記

松　村　一　男
（昭和55年修士修了）

81年9月より84年9月迄の3年間，フルブライト奨学生としてカリフォルニア大学ロスアンゼルス校（UCLA）印欧語族研究プログラム（Indo－European Studies）に留学し，博士論文を書くために必要な資格試験を終え，この程帰国した。

留学前の研究対象は主として帝制期以前のローマ宗教・神話であり，フランスの神話学者G.デュメジルの三機能体系説からの分析を試みていたが，アメリカに於いて研究領域をより拡げ，他の印欧語族諸派の宗教・神話との比較研究を一層深めようと考えたのである。

デュメジルの手法による印欧宗教・神話研究のアメリカでの中心は，UCLAとシカゴ大神学校であり，いずれも入学を許可されたが，留学前年に東大人類学科に交換教授として居られたデュメジル研究の第一人者であるC. S. リトルトン氏（『新比較神話学』みすず書房，の著者）の推めもあり，J. プーヴェル氏のいるUCLAを選んだ。

UCLAに着いてみると，予想とはやや異なる事態が待っていた。UCLAからはデュメジル的視点からの二冊の論文集の他，デュメジルの著作の英訳も出版されており，当然神話を研究対象と出来ると思っていたのだが，そうではなかったのである。つまり，専攻とし得るのは比較言語学か考古学であり，神話研究は副専攻としてしか認められていなかった。従って，言語学専攻となった私の勉強の中心は比較言語学と印欧諸言語の学習（とても研究とは呼べない）であり，資格試験もそれらが中心であった。

しかし，印欧語族の宗教・神話を比較の立場から研究する以上，色々な言語のテキストを原典で読み得る力を持っているのは望ましい。そうでなければ，論争の焦点となっているテキスト解釈について自らの判断を下し得ないし，翻訳のないテキストは自分では研究出来ないからである。デュメジル氏もプーヴェル氏も殆どの印欧語を原典で読み得る他，神話研究のみならず専門言語の分野でも業績が多い（デュメジル氏はコーカサス諸語の，プーヴェル氏はヒッタイト語の世界的権威）。

学習可能な言語の数は多く，また授業はかなり厳しい。私が取ったのは，ホメロス期ギリシア語，ヴェーダ語（最古期のサンスクリット語），ヒッタイト語，古代イタリア諸方言（オスク語，ウンブリア語），古代アイルランド語，中世ウェールズ語，古代北欧語，ゴート語等であるが，この他にも古代教会スラヴ語，古英語，ミケーネ期ギリシア語，ギリシア語諸方言，アヴェスタ語，中世ペルシア語，古高地ドイツ語，古代アルメニア語等の授業があった。しかし，これらの言語に堪能になった訳では勿論ない。長い場合（ギリシア語，サンスクリット語）でも一年数ケ月，短い場合では三ケ月で一つの言語の授業を終えてしまうのだから，最低限の文法を知り，限られたテキストを何とか読めるようになったに過ぎない。しかしそれでも，今後研究を行う上で大いに助けになると思われる。また，これら諸言語の他には，比較言語学，印欧考古学，比較神話学等に関する授業があった。

この様に本来の神話・宗教研究には充分な時間が割けなかったが，それでも比較神話学の講義とセミナー，ギリシア神話のセミナーがあり，有意義であった。また言語の授業でも，神話・宗教関

係のテキストを，一部の場合が多いが幾つか読んだ（『リグ・ヴェーダ』，『イーリアス』，古代北欧語の『巫女の予言』，ウンブリア語でイグヴィウム青銅板に記された宗教祭祀等），このうち比較神話学のセミナーでは，デュメジル氏の著作（*Mythe et épopée* II，Gallimard 1971 の第二部）を読み，我々が分担して英訳した。この訳はカリフォルニア大学出版より *The Flight of the Sorcerer* として上梓される予定である。

さて資格試験だが，これもかなり厳しい。まず本試験の前にドイツ語，フランス語，ロシア語のうちから二つ選択の現代語の試験がある。本試験は，言語学専攻の場合，六つの古代語，考古学，比較神話学，比較言語学である。古代語の試験は授業で読んだテキストの中から出題され，訳と文法的説明が中心で，時間は一言語30分と短い。しかし何処から出題されるか分からない以上，時間が短くても余り助けにはならない。加えて，ヴェーダ語はサンヒター・テキストのみがデーヴァナーガリで，ヒッタイト語は楔形文字で出題されるので，それらの文字も覚えねばならない。考古学と神話学は各一時間半，言語学は三時間の試験である。これらに合格すると，最後に口頭試問がある。普通は半年程の期間中に適当に間隔を設けて行うのだが，私は準備が間に合わず，帰国直前の九月に全てを受験したため，一層大変となった。

こうした学習の他，83年の夏には市内のオキシデンタル・カレッジで，夏期講座の講師として，短期だが日本文化と宗教人類学を教えた。先に名を記したリトルトン氏が研究のために日本に行っており，その代理をしたのである。大学生に教えたのは初めてであり，よい体験となった。

さて，日米の大学の違いについても考えさせられた。但しアメリカでの見解はＵＣＬＡに限られるから，勿論一般化は出来ないが。ＵＣＬＡで興味深いのは，学部生に対する入門的授業の場合，将来教授職を希望する院生が，教授の指導下で授業の一部，場合によっては全部を受け持つ場合が多いという点である。分野によってはこうした授業担当を（一部だが）単位として認定するし，それが課程での必修単位であったりもする。こうした院生は TA (teaching assistant) とか staffs と呼ばれ，大学から給与が支払われる。勿論，学部学生の授業理解の水準に不安がないとも思えないが，私が見た限りでは，学部生達は教授より近づきやすい院生の授業をむしろ楽しんでいて，より積極的に質問や発言をしていたように思われた。この他，院生には教授の研究の補佐をするＲＡ (research assistant) という制度もある。これは教授の研究の一部を受け持ったり，文献探索，原稿のタイプ・校正を行うものである。つまり給与を大学からもらいつつ，専門分野の研究に参与し得る訳である。勿論，こうしたＴＡやＲＡは数が限られている。私の居たプログラムは正規の学科ではなく，博士課程のみの学際的な特殊プログラムであったから，当然教えるべき学部生はなく，TA の制度はなかった。また RA も極めて数が限られていたので，私は一学期間，ケルト神話の雑誌文献目録作りをしたのみである。だが兎も角，院生のうちから大学生に教える体験をしたり，自分の専門分野の知識を深めつつ生活の糧を得られる訳で，それを学外に求めねばならない日本の場合よりは恵まれているだろう。

他に図書館が素晴しかった。蔵書数では全米十位だが，サービスその他を含めた総合点では第三位にランクされている。平常は朝八時から夜十一時迄，週末や学期間の休暇中も時間は短縮されるが開館しており，完全に閉館するのは祝日のみ（勿も午前一時，二時迄開館している大学図書館もあると聞く）。全開架式で，学生のみならず学外者も自由に入れる。貸出は冊数制限無しで期限は三ケ月（院生の場合，また期限は更新可能）。必要な本が貸出されている場合には，借用者に連絡がいき，半月以内に手に入る。またＵＣＬＡにない本は，カリフォルニア大の他の八つのキャンパス（バークレー校の蔵書数は確か全米第二位）から借りられるし，それでもなければ図書館員が全米のどこかから必ず見つけてくるという。多数の学生がアルバイトで働いていて本の整頓をしている他，古くなった本は同種のものが購入可能なら新しいものと替えられるし，不可能な場合でもかなり良い状態に補修されている。コピーの機械

も自分でとれるものが館内に多く置かれている。このため，私のような幾つもの分野にまたがった研究をする者にとっては，甚だ資料が集めやすかった。東大では幾つかの研究室を訪ねて借出したり，図書館でもいちいちカードに記入してはじめてコピーを取れるのに比し，ずっと能率が良い。また借りた本を三ケ月かけてじっくり読めるのと，一～二週間で返却期限が来るのでは大きな違いがある。この他，コンピューター化された探索システムで，著者名，書名の他，分野，トピック毎に未登録の本迄知る事が出来る。こうした図書館システムでは，東大はかなり遅れているのではないだろうか。尚余談だが，ＵＣＬＡでは図書館が寄贈を受けた本のうち必要としないもの，及び上述の如く古くなって新しい版と取換えた本が図書館内で安く売られている。稀にだが高価な本や珍しい本，雑誌も入手出来，私はとても重宝した。

この他にも学内にコンサートホール，美術館，博物館，映画館がある事等，想い出は色々あるが，ここでは，一般に日本ではスポーツ大学の如く思われているＵＣＬＡのそれ以外の面も知って戴きたく，私の体験を述べてみた次第である。